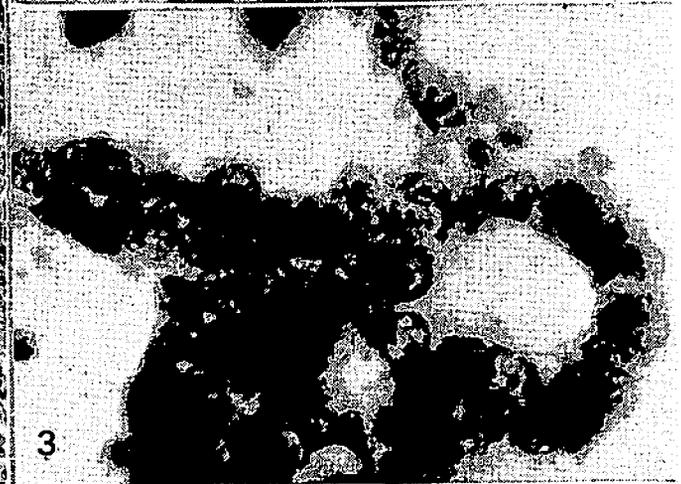
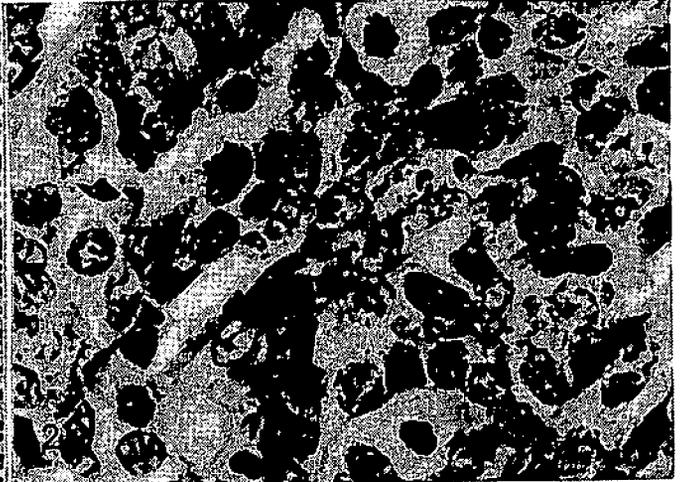
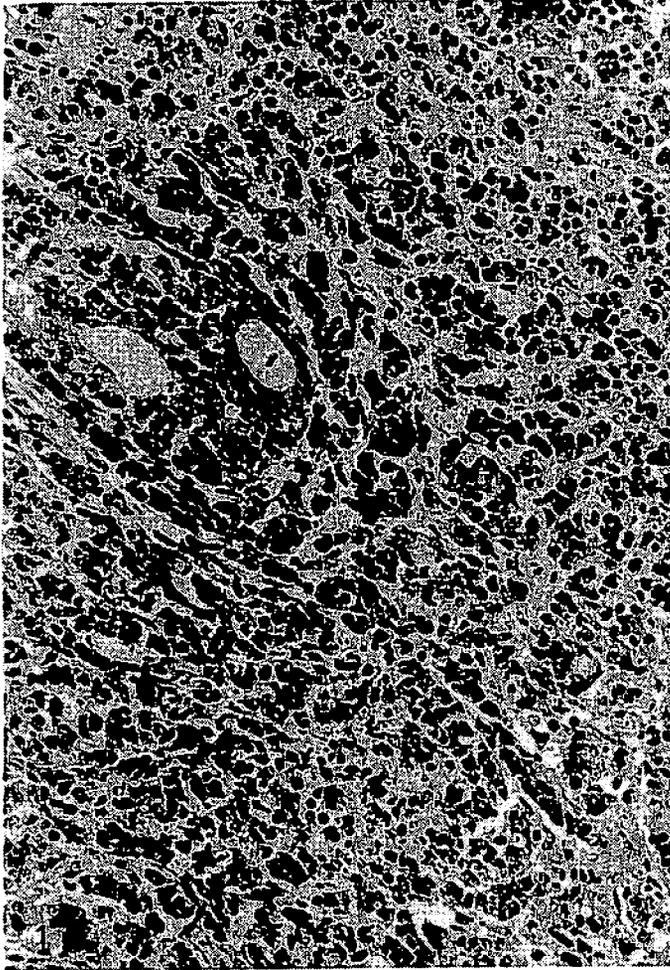


ネコの子宮腺癌

山口大学農学部家畜病理学教室出題

第18回獣医病理学研修会標本 No. 285



動物：在来種、雌、13才。

臨床：昭和52年5月12日、子宮内に胎児遺残を疑い試験開腹したところ腹腔内に腫瘤をみとめたので予後不良として、腹水約600 mlを除去後に手術創を閉じた。5月14日、安楽死直後に剖検した。

剖検所見：開腹すると著しく腫大した子宮と胃の大彎部近くにみられた拳大の腫瘤により腹腔の大部分が占められ、血様の腹水を容れる。子宮は体部より右側子宮角に亘り漿膜面に膨隆する小豆大～小指頭大の灰白色結節が多発し、内腔は狭窄していた。腸骨リンパ節は右側が小指頭大、左側は拇指頭大に腫大し、灰白色髓様で硬度を増していた。脾臓は脾尾横隔面に大豆大の黄白色結節を、また肝臓、肺にも同質の結節をみとめた。

組織学的所見：子宮は内膜下より筋層にかけて上皮性細胞が増殖し(写真1, H-E, 100倍)、一部筋層間に浸潤増殖する像をみとめた。比較的大型の明るい核を有する細胞が繊細な結合織を伴って増殖し髓様癌の所見を呈するが部位によっては腺胞構造の形成がみられ、また比較的

丈の高い円柱上皮様の細胞が結合織に沿って増殖する像もみとめた。腸骨リンパ節は皮質の一部にリンパ濾胞構造を残して大部分が子宮と同様の上皮性細胞の増殖により占められ、胃大彎の近くにみられた拳大の腫瘤および肝臓、肺、脾臓(写真2, H-E, 400倍)の結節も子宮と同様の上皮性腫瘍細胞の増殖をみとめた。

家畜の子宮腺癌の発生は比較的稀で、ウシでは結合織の増生の強い硬性癌の傾向がみられるのに対し、イヌネコでは結合織の増生のみられない腺癌の像を示すといわれており、本症例は前述の所見より子宮原発の腺癌と診断した。

なお新鮮な腫瘍組織が入手できたので、リンパ節転移病巣より細胞培養を試みた。培養開始後、約1年2ヶ月を経過し安定した増殖を示しており、培養細胞は比較的小型で原形質に乏しく、細胞は索状に長く配列し、また一見腺胞様の構造を形成し増殖する(写真3, カバースリップ培養, 9月, 継代12代, 15日, H-E, 400倍)。培養細胞の性状について現在検討中である。

2 copy

dup mul exch dup mul add sqrt

dup

scale

atan